

ORIENTAL STUDIES TRIPOS Part II

Japanese Studies

Tuesday 7 June 2011 09.00 – 12.00

J.13 JAPANESE TEXTS, 2

*Candidates should answer **ONE** question from Section A and **TWO** questions from Section B.*

*Write your number **not** your name on the cover sheet of each Answer Book.*

STATIONERY REQUIREMENTS SPECIAL REQUIREMENTS

20 Page Answer Book x 1 None
Rough Work Pad

You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed that you may do so by the Invigilator

SECTION A

Candidates should translate **one** of the following **two** passages from unseen texts:

- 1 Translate into **English**: [40 marks]

第3節 内政と日中関係

日中関係を理解するためには、それぞれの時点における国際環境とならんで、日本および中国における国内政治の状況も把握しなければならない。日本、中国それぞれの内政の具体的変化について触れていくときりがないが、それぞれについて、いくつか基本的な特徴を指摘しておこう。

まず、日本については以下の点が指摘されるべきであろう。第一は、戦後のほとんどの時期を通して、日本の政治体制は、自由民主党が政権を握る議院内閣制であったということである。自民党の長期政権のもとの議院内閣制であることから、日常的な政策決定は政府の業務とみなされ、「官僚主義」で行われる。しかし、問題が日常的でない場合——重要な国との国交をどうするか、重要な条約

question continues...

をどのように締結するか、などという問題の場合——は、総理大臣や外務大臣の役割は重要になるであろうし、自民党の内部の意見調整も必要となるであろう。自民党の政権が長期に続いたことの一面として、重要な政策変更は、首相の交代とともに行われる傾向が強い。党と党の間の政権交代によって政策が変わるものではなく、自民党内の異なる派閥連合によって担われる首相が登場することによって、従来の政策と異なる方針が打ち出されることが多いのである。それぞれの内閣は、外交面でも、大きな課題を最低一つはこなそうと努力することが多いのであり、日中関係の問題が、そのような課題になることもかなりあった。

第二に、日中関係に関していえば、日本国内では、北京支持グループと台湾支持グループがかなり固定的に存在した。野党は、文化大革命までは中国共産党との友好関係を保ちその後関係を断絶した共産党を除けば、おおむね、北京の中華人民共和国を支持していた。それに対し、自民党には、中華人民共和国支持の勢力と台湾の中華民国支持のグループが存在していた。大新聞も、一九七〇年代までは、一部を除くと、おおむね中華人民共和国支持の姿勢が強かった。

第三に、世論のレベルでいうと、第二次世界大戦の反省から非常に強い対中国罪悪感が存在したと同時に、戦前の日本の侵略をなんとか正当化したいという感情も存在した。一九七二年の国交正常化までは、対中贖罪意識は、日本政府に対して、中華人民共和国との国交正常化を迫る一つの根拠となつたし、国交正常化以後は、中国への経済協力なりその他の協力を積極的に行うべきだとの主張の裏付けとなつた。一方、戦前の日本の行為を正当化したいという感情は、時に中国の対日批判への反発となつて現れ、それがまた日中間の問題となることにもなつた。このような第二の特徴と第三の特徴が組み合わさることによって、日中間の問題が、あたかも日本国内の内政問題でもあるかのような様相を呈することも多々あった。

贖罪	atonement
罪悪感	guilty conscience
断絶	rupture, discontinuation

TANAKA AKIHIKO, *Nitchū kankei, 1945-1990* (1990), pp. 18-20.

(TURN OVER)

2 Translate into English: [40 marks]

痛いと言う程では無かつたけれども、両肩が重かつた。肩が凝つたという経験が無いので、これが所謂肩凝りなのかどうかは良く判らなかつたが、兎に角、昨日一日、両肩が重かつた。一昨日で二晩続いた自作のオペラの公演が終わつたばかりなので、三月の初め以来続けていた練習と二晩の公演の指揮のために肩が疲れたのかと思つた。然し、何時もはこういう音樂的労働に従つたからと言って肩が疲れたりはしない。今度のオペラは幾分演奏が難しいものだつたから、肩に不必要的力を入れ過ぎたのかと思つたりした。然し、自

玄関



53
6
2

question continues...

分らしく無い。

肩が重い、変だと思いながら東京に出て、文化庁の会議に出席した。夕方になつて会議が済んだので、小雨がぱらつく中を、麹町のクラブ関東に赴いて、同クラブ主催の中国大使館関係の方々との懇親夕食会に出席して、符浩中国大使夫妻、クラブの今里広記理事長、日本文化交流協会の中島健蔵、宮川寅雄先生方と楽しい時を過ごした。けれども肩は重い儘だった。符浩大使御持参の中国銘酒、茅台酒、大麴酒、五糧液等々の蓋を重ねて相当に酔が廻ったけれども、肩の重さは消えなかつた。

帰つて、未だ続いている肩の重さを感じながら床に入った。眠つてからも、夜半に何度か、肩の重さに眼を覚ました。

今朝、起きた時に先ず感じた事は、矢張り肩の重さだった。正確に言うならば、肩の重さで今朝は眼を覚ましたと言う方が正しかろう。

窓の外の音を讶りながらカーテンを開けると、外は昨日に増しての悪天候だった。激しい雨風に、このところ窓下の崖地から大分伸び上がって来た大葉夜叉五倍子の枝先が揺れ靡く遙か下に、海が灰色に波立ち騒いでいる。

台所で家内がことことと朝食の仕度をしている音を茫然と聞きながら食卓の前に坐つていると、突然、玄関の方でがたんと大きな物音がしたので、行つてみると、玄関の扉の外に置いてあるシフレラの大鉢が風で倒れていた。植木鉢を立てて、零れた土を鉢に戻して、序でだったので玄関の掃除をした。

所謂	<i>iwayuru</i>	今里広記	Imazato Hiroki (personal name)
兎に角	<i>tonikaku</i>	茅台酒	Maotai (liquor name)
然し	<i>shikashi</i>	大麴酒	Daqu (liquor name)
麹町	<i>Kōjimachi</i> (place name)	五糧液	Wuliangye (liquor name)
儘	<i>mama</i>	訝る	to be concerned about
符浩	Fu Hao (personal name)	靡く	to flap

DAN IKUMA, 'Genkan', *Paipu no kemuri, Kasanete*, (1982), pp. 244–45.

(TURN OVER

SECTION B

Candidates should answer **two** of the following **three** questions taken from seen texts:

- 3 Translate into English: [30 marks]

中国の変化

歴史家の間の対話が必要と考える第一の理由は、次の点である。すなわち、日中両国間には、資源・エネルギー、環境、少子高齢化等協力して取り組むべき問題が山積している。しかし歴史問題が焦点となれば協力は進まない。もし両国政府が、歴史問題の議論は当面は歴史家に任せようと合意して、歴史問題を非政治化すれば、政府は本来の仕事に取り組めるようになる。政治ができることは現在と未来のことだけである。政府の仕事から歴史問題を取り除くことによって、日中両国の外交関係を発展させる余地を大きくすることが必要なのである。

二〇〇五年春の大きな反日運動の後、中国の変化を感じたのは同年秋である。胡錦濤国家主席は九月三日に行なった戦勝六〇周年の記念演説で、日中戦争下の抗戦態勢について、次のように述べた。

「中国国民党と中国共产党が率いる抗日部隊は、敵の正面と背後の作戦任務を分担し、共同して日本の侵略者に抵抗する戦略態勢を構築した。国民党の軍隊が主役となつた正面の戦場では大規模な作戦が展開された……中国共产党が率いた敵後方の戦場では広範の大衆を動員してゲリラ戦が繰り広げ

question continues...

(TURN OVER)

られた」

盧溝橋に続く上海、徐州といった大戦場の主役が、八路軍など共産党部隊ではなく、国民党の正規軍だったことを国家主席自らが認めたのである。それは、国民党、台湾政策への配慮からなされた面もある。しかし中国に新しい動きが出てきていることは確かであり、何か可能性が開けているのではないかという印象をもつた。

中国における歴史問題の難しさは、言論の自由が十分でないということだけではない。中国では王朝が変わるたびに、前の王朝の崩壊と新王朝の成立が必然であつたといふことを証明するのが歴史家の責任だつた。中華人民共和国のもとでも、それは同じである。国民党の役割への言及は、その意味でも大変なことだつた。

胡錦濤政権が対日関係改善を指向するようになったのは、江沢民前政権の勢力に対して自信をつけたからであった。二〇〇六年一〇月、第六中全大会（共産党第一六期中央委員会第四回全体会議）の初日という、通常は首脳会談が開かれるはずのない日程で、安倍・胡錦濤会談が開かれたのは、その証拠であつた。

KITAOKA SHIN'ICHI, 'Nitchū rekishi kyōdo kenkyū no shuppatsu', *Gaikō Fōramu*, (May 2007), pp. 15-16.

4 Translate into English: [30 marks]

「戦後総決算」は完結していない
 国連が正統性を高め、活性化し、二一世紀社会の問題により効果的に取り組めるよう改革を進め、その中で日本がより積極的な役割を果たすことが、日本の広い国益に直結した望ましい外交活動方針であることは疑いを容れない。そのためにはマルチ外交を外交戦略全体の中で根本的に見直す必要があり、いまがその好機であると考えるが、どうであろうか。

あえて私見を言えば、日本と国連の関係を直視するとき、眞の「戦後の総決算」は、

これから五〇年先を睨んだ新しい国連外交の礎を築くべきときに来ているのではない。幸い、一〇〇五年の「成果文書」では安保理改革と旧敵国条項廃止という、ともに憲章改正を必要とする改革への合意が盛り込まれた。日本にとり、歴史的チャンスが用意され、土俵が築かれた。これをどう活かすか、真に日本の外交力が試されるときである。

安倍新政権の下、安保理常任理事国入りをめざすことが所信表明で力強く明言された。日本は過去五〇年間、平和や軍縮、人道・開発援助などの分野で真摯な努力を重ね、各國の敬意を集め影響力を持つ地位を築いてきた。このような貢献と「生き様」に対する率直な評価が、日本の安保理常任理事国入りに対する多数国の支持につながっている。これは国民として誇りうる貴重な外交資産である。ただ最近、政府開発援助(ODA)削減などのおりで、この資産が一部、静かに着実に減耗し始めている

まだ完結していないと思う。日本にとっての総決算とは、安保理の構成や旧敵国条項に象徴される六〇年前の遺物の壁を乗り越えること、その上で、上述の世界の諸課題により積極的に取り組むことで実現されていくと考えたい。国連加盟五〇周年の節目に、このことの意義を再認識し、政治意思を明確にした上でしつかりした戦略を立てて、これから五〇年先を睨んだ新しい国連外交の礎を築くべきときには、必ずや実現される。将来に向けて漂流を食い止め、志を新たにすべきときである。

また、国連における「戦後の総決算」は日本と近隣アジア諸国との関係を抜きには語れない一面もある。この点、新政権の下で中国、韓国との関係を始めとする、新アジア外交への転機が訪れているのは幸いだ。さらに付言すれば、この一〇月、韓国の外交通商部長官の潘基文氏が次期事務総長に選ばれたが、これは「今度はアジアの番」という地域ローテーションの考えが背景にあることはいえ、二一世紀初頭の国連においては「勃興するアジア」が主導的役割を果たしてほしいという国際社会全体の期待の現れとも考えたい。これからは経済的に力をつけてきたこのアジアが国連を再生させ安保理における日本の新しい地位の確立、潘外相の事務総長就任、中国・インドを始めとする東アジア・南アジアの著しい発展は、国連の改革と再生のためにアジアが重要な役割を果たしうる歴史的機会をもたらすものだと考えたい。

5 Translate into English: [30 marks]

それから七度目の夏がめぐって來た。焼野原は異国の色彩のあふれる街並に変貌した。そしてその街並を大男の異国の人たちが歩いていた。

女たちは爪を赤く染め、紅の唇を開いたり閉じたりしてチューインガムを咬み、立ち止つたときは腕や脚を組んだ。そういう身なりや仕草を見たことがなかつたこの國の人たちは初めのうちただ口をぽかんとあけて眺め、それからうなだれて首を振つた。

だが、うなだれながら、ちらちらと目を上げて素早く、仔細に観察し、やがて、そ知らぬ顔で、それらを流行にとり入れた。

女はなぜか戦争中の特攻隊のハチマキや女子挺身隊のモンペ姿をいちはやく流行にとり入れたことを似通つたものに思い出した。

街の女たちはときどき異国の男をとり合つて街角で喧嘩をした。それは華やかなショウで、人びとは輪をつくつて見物した。同胞の姉妹たちが自分たちを敗かした異国の男をとり合つて、白い腿をむき出しにしてとつ組み合いの喧嘩をするのを兄と弟が、かたずをのんでみつめているのである。同胞の男たちは囁いていた。

「カルメンのようだな」

「プロレスのようだな」

「髪の長い方の奴が強そうだ」

街には光る車が増え、

ビルのガラス窓は透明になり、

男たちは真っ白なワイシャツを身につけるようになり、

真っ白なワイシャツを身につけた男は、

そんな喧嘩を輪をつくつて見物はせず、

question continues...

(TURN OVER)

光ったオフィスで黙つて札束を数えた。

寂しい風が吹き、

蒼ざめた月が昇り、

赤い陽が沈み、

犬が骨を咥えて行き過ぎ、

女は怯えて立ちすくんだ。

女は怯えて立ちすくんだ。異国の青年が犬を訓練して骨を投げては犬にそれを持つてこさせていた。女は異常に怯え、歯の根が合わないほどに憚え、立ちすくみ、失神した。

そのむかし、四つになつた妹が、焼野原でされこうべと遊び戯れていた犬の背を撫で、されこうべを抱きかかえ、あどけなくにつと笑つたのは、丁度こんな赤い太陽の沈む夕暮れだった。

異国の青年は驚いて大急ぎで女を抱き起し、病院に運んだ。病院で意識をとり戻した彼女に、医者は根掘り葉掘りさまざまな質問をしたが、女の答えるきれぎれの話をつなぎ合わせて、医者は次のような診断を下した。

「青春期の一種のヒステリーでしょう。まあ、大した理由もなく氣絶するのもヒステリーと呼ばれる症状です。ホルモンのバランスがくずれる時期ですから」

通訳を交えてのたゞたゞしい説明に、異国の男は首を振り、あやふやな納得の表情だつた。だが、どういうわけか、女はこの異国の男と結ばれることになつた。多分、女の国が貧しく、したがつて女は貧しく、異国の男は、街の女ではないこの国の女と、正当な手段で近づきになつたことにすっかりいそいそとしてしまつたからだろう。

ŌBA MINAKO, *Mukashi onna ga ita*, 1994, pp. 11–14.

END OF PAPER